

平成16年度購入資料の紹介

——中国陶磁器等——

高橋 隆博

少し前のことになるが、漢代の緑釉陶器や唐代の白釉陶器など、いささかの中国陶磁器が当館の収蔵品に加わり、これが学生の教育と研究に大いに資することとなった。こうした経緯もあって、中国陶磁器のさらなる充実をはかってきた。そして、これまであわせて12点を数えることになり、時代的にも漢代から明代までの作品がともかくも揃ったことになる。

しかしながら、中国陶磁器は、時代的にも、地域的にも、さらには技法的にもきわめて奥深く、それらの収集となれば、とても一朝一夕にしてなるものではない。したがって、ようやくにしてその緒についたばかりというべきである。

とはいえ、昨年、関西大学創立120周年記念事業の一環として、また博物館開設10周年記念として「名品展」を開催し、そこにこれまで収集してきた中国陶磁器のすべてを陳列できたことは、私たちの大きな喜びであった。

本年度は、3点の中国陶磁器と朝鮮のやきもの1点、そして蒔絵の鏡台1点を購入した。購入に際しては、価格との「折り合い」もさるこ

とながら、「出会い」と「タイミング」がつかまとう。その機会をのがしてしまうと、再び出会うことなどほとんど稀なことが多い。朝鮮のやきものと蒔絵鏡台は、そうした作品である。

緑釉博山酒尊

(前漢～後漢 前1世紀～後1世紀 高28.8センチ 径22.5センチ)

三脚をつける緑釉の酒尊。蓋を山岳につくり、円形の胴部には、狩りをする者と疾駆する動物たちを浮き彫りであらわし、脚を動物に象っている。山形の蓋は、海中にあるという仙山「博山」を象徴するもので、こうした「博山」意匠は漢代に流行し、銅製の博山香炉がつくられ、これが六朝時代に入ると仏教の香華供養に欠かせない仏具となった。

本作品は、博山を象っているものの、香炉ではなく、酒を温めるための器物で、もとより墳墓に埋葬された明器である。なお、表面の色調のことをいわゆる「銀化」とよんでいるのだが、もともとはあざやかな緑色で、それが永い年月による風化のため銀色を帯びるようになったものである。

漢代には、厚葬の風習がますますさかんになり、墳墓には実際の構造物や生活用具を模した焼きものや漆器が副葬された。厚葬の流行は、鉛釉陶の発達をおおいにうながし、中国陶磁磁史にとって、エポックをなす技術革新の時代となった。

鉛は、鈍い灰色の重金属で、これはケイ酸を800～900度で溶かして、いわゆるクリスタル・ガラスとよばれるキラキラと輝く透明の美しいガラスをつくるのだが、この鉛ガラスを釉薬に応用したのが鉛釉陶である。

基本的には、鉛釉は透明釉で、銅を呈色剤につかうと緑色に焼成され緑釉となり、鉄を呈色剤にもちいると褐釉となる。なお、出土例からみれば、緑釉陶は黄河流域の華北で流行した傾向がみられる。



瑠璃地草花文大皿

(明代 16世紀 径36.0センチ)

素地に瑠璃釉をかけ、その上から白泥で草花文をあらわした大皿。この作品に見られるような、白泥一色で草花文様を描いたものを、日本では俗に「餅花手」といい、褐色地のものを柿南京、藍地のものを瑠璃南京とよんでいる。

餅花とは、小さくまるめた餅を柳の若枝につけ、それを部屋の鴨居あたりに飾りつける正月15日（小正月）の風習で、白い花が盛り上がって、正月飾りの餅花のように見えてところから「餅花手」の名が生まれた。白泥をつかった描法には、絵筆による線描と点描とがある。点描は、筒筆といわれるように、白泥を筒に入れ、これをしぼり出しながら描いていく技法で、イギリスのスリップ・ウェアと同じ手法である。

こうした餅花手の磁器は、多くの呉須赤絵の磁器と同じように汕頭（中国広東省）磁器とよばれ、ヨーロッパ向けの大量生産の輸出磁器であった。そのためもあってか、文様と描法には精巧さはみられない。逆にそれが一種の気楽な味わいを醸しだしている。



白磁香炉

(明代末 17世紀 高7.5センチ 径8.8センチ)

低部に刳り形飾りの三脚をつける円形の白磁香炉。胴部には、肩部から下部にかけて、あわせて四本の帯条を浮き彫りでめぐらしている。この帯状の意匠が、この小さな香炉をじつにきりっと引きしめており、瀟洒な姿形をさらにきわだたせる装飾効果を發揮している。

器胎はそれほど薄くはないのだが、手に持って透かして見ると向こう側の指がみえるほどに透明感がある。この白磁の色調を、牙色、あるいは玉のような、さらには澄みきった白色、とでも形容されようか。

中国の白磁といえば、なんといってもアイボリーがかった釉薬を特徴とする定窯の白磁にまず指を屈しようが、この作品が示しているように、徳化窯の白磁もじつに品格が高い。

こうした色調の白磁は、明代以降に、現在の中国・福建省徳化県で生まれた焼きもので、白建窯白磁あるいは福窯白磁ともいわれている。日本では、白建窯のことを白南京とか白高麗とよんでいる。徳化窯は、明・清代の白磁器の名窯として知られていたが、近年の発掘調査によれば、宋・元代の白磁と青磁の窯も確認されている。



粉青印花菊花文茶碗

(朝鮮時代 15世紀 高5.8センチ 径16.2センチ)

茶碗の見込みに二つの界線をめぐらし、中央の界線内には二つの菊花文と「内贍」字をあらわし、その周囲に剣菱文をめぐらし、さらにその外側には鎬文を配している。こうしたやきものを日本では俗に三島手といい、現在朝鮮では粉青沙器（粉装灰青沙器の略）とよんでいる。見込みの「内贍」とは、『経国大典』や『太宗実録』によれば、朝鮮王朝3代の太宗王の3年



(1403) 6月に、徳泉庫を廃して設置した宮殿供物を司る機関の「内贍寺」のことである。

技法的には、鼠色の胎土をもちいてロクロで成形し、半乾きの素地に菊花文や剣菱文の型を押しつけて印文をほどこしたのちに白土で化粧掛けをほどこし、さらにこれを拭き取ると、まるで印文の凹部に白土を象嵌したような表現となる。これに透明の釉薬をかけて焼成するのである。

三島手の名称は何に由来するのか、どうもはっきりしない。地文様となっている鎬の波形文や印花の象嵌文様が、三島暦の文字に似ているところからついた名称というのが通説とされている。三島暦とは、伊豆国の三島明神社が応仁・文明のころ、伊豆と相模の両国に限って頒布した仮名の細字書きの暦のことである。ちなみに『茶道正伝集』は、「茶碗に昔伊豆三島より出せる三島暦に似たるを文様あるをもって之を三島といひ、又暦手ともいふ」と記している。

てっせん 黒漆鉄線花文蒔絵鏡台

(江戸時代 元禄期 17~18世紀 高62.7センチ)

総体を黒漆塗りとし、それに鉄線花文を金と銀の蒔絵であらわしている。花卉や葉の一部には梨地粉を蒔いて変化をもたせている。鏡台の

引き出し内には蓬莱鏡を納める金蒔絵の鏡箱をはじめ、やはり金蒔絵の元結箱や髪文字箱、白粉箱、さらに眉作り刷毛、頬刷毛、さらに金蒔絵の牙製刷毛や毛棒などが内容品として納められている。ただ、鏡架けの部分は別の鏡台のそれと入れ替わっているところだけが惜しみきれない。

それにしてもこれだけの豪華な装飾と内容品を伴っている鏡台は、それほど例を多く数えるわけではなく、貴重な作例であることにちがいはなく、おそらく、大名家の婚礼調度としての鏡台であったとみなしてよい。こうした鏡架をつける箱形の鏡台も形式が成立するのは、桃山時代に入ってからのもので、江戸時代には、こうした鉄線花文蒔絵鏡台のような形態のものが大名婚礼調度として定型化していく。

